

相部屋考

峰

自分が最初相部屋についてどのようなイメージを持っていたのかも思い出せないのだが、寮に見学に来る人の多くは「一部屋に何人くらいですか」と聞くことが多いので、きっと相部屋というと一部屋を一定の人数で共有する形態を連想するのがポピュラーなのではないかと思う。他の大学の寮のウェブサイトを見てみても一部屋あたりの収容人数が明記してある場合が少なくない。

翻って吉田寮の場合、一人当たりのスペースは大体決まっているが、部屋あたりの人数はまちまちである。部屋の広さがまちまちだからという理由のほかにも、多くの場合は2部屋3人など、いくつかの部屋を何人かで共有することになるためというのが、わかりやすく一律一部屋何人という話にならない原因として大きい。いつからこうしているのかは知らないが、これはある面で現実的である。人が皆夜寝て朝起きるとは限らないし、その時々寮生の人数で床面積を割ったときにきれいに一部屋一部屋均等に割り振れるようにはなかなかないのだから、それでもなお不便を感じにくく、均等に割り振るために、適当な値になるまで部屋の面積を足し合わせてそれを適当な人数で割るという方法をとっているわけである。

さて、例えば電子レンジや掃除機といった生活用品は、多くの場合部屋ないし生活単位にひとつあれば事足りるものであり、人数分なくてはならないものではない。相部屋の利点として昔からよく言われることとして、この「必需品の共有による経済的負担の軽減」というものがある。私は座椅子とちゃぶ台を共有に付し、同じく共有に付された炊飯器や電子レンジを使って日々生活している。

経済的負担という視点以外にも、生活空間を共有することから他者との接点が生じ、それをきっかけに自分の世界が広がることもある。私の今年度の相部屋相手には音楽や映画に詳しい人、文学研究科博士後期課程で哲学の研究をしている人、マンガやアニメに日々知識関心を広げている人などがいて、私は彼らから少しずつ、時に強い影響を受けて関心方面を広げることができたように思う。

以上の素描からわかるように、なにも相部屋制度のためばかりではないが、吉田寮では誰かと共有することでわざわざ買わずに済むものや安く済むものがあったり、自分の学部や専門の枠にとられない様々な文脈での交流があたりしうる。反面オートロックのマンションのようなセキュリティはないしプライバシーなど保障されてはいない。²⁴ 時間誰かと常に顔を合わせて生活することになりうるし、そのためにいさかいに発展することだって十分にありうる。

なべて物事はそれを評価する人がどう見るかによってどのようにも語られうるものである。相部屋制度にしたところで、ある程度積極的に受け容れる気がなければいい部分として捉えることが可能なことでも悪い面ばかりが際立って見えるし、わざわざそのように受け取る努力を払う価値をそもそも見出さない人だっただけでしかるべきである。硬直した価値観が他者に絶望感を与えるのと同様に、ある集団が一律な価値観を無批判に受け容れていることは大層気持ちの悪いことだ。吉田寮における相部屋はそうした賛否両論を踏まえた上で、建物のキャパシティの問題や現在の意思決定システムの維持のために一定敷かざるを得ない制度として施行されている。それを個人々が面白いもの、価値あるものとして捉えるか、はたまた単なる必要悪として捉えるかは、また別の問題

である。

私は、だから結局個人的な好悪を述べるに留まるが、例えば新入寮生として初めて体験した至近距離での人間関係（それは私にとって同時に、背景文化や母語の異なる人との日常的なコミュニケーションという側面においてもほとんど初めての体験であった）において、適正な距離を保つことに極めて困難を覚えたことであったり、個人的習慣として物事の優先順位が一致しない他者と同じ空間を共有することの難しさといった、思い通りにならなかったことも含めて、代えがたい貴重な経験をしてきたと思う。

つまるところ私の場合は、私にとって糧になった部分、楽しかった部分が、思い通りにならなかったところや嫌だったところを上回った、というふうにも言えるが、おそらくそういう天秤問題だけではない。これらすべては「他者」との接触であることから生じ得、かつそれ以外ではあり得ない、自らの外部にさらされる経験であると言ってもいいだろう。逆説的なことかもしれないが、例えば外国に住み始めるなどして異なる文化に放り込まれるより、母語を共有し出身地域もさほど遠くない人と同じ部屋で暮らすことのほうが、余程自分の価値観の相対性をつきつけられることになる、と言っている。

思い起こす5年前の今頃、私はもうほとんど決まったこととして吉田寮に入寮することを考えていた。赤本に載っている京大の General Information に寮の名前と所在地、諸費用が載っていて、その安さと近さに驚愕したものであった。情報としてはせいぜいそのくらいである。インターネットで検索していたらまた捉え方が違っていったかもしれないが、私はそれすらもしないくらいに想像力を欠いていた。いわんや、そうした他者との接触を具体的にイメージできようはずがない。私をとりまくことになるあらゆることに対して全くの無防備なままに、それまで一切経験のなかった距離感のレンジに自らを放り込んでしまった。

人はあらゆる、時として自分自身すらも含む「他者」について、決してその心内表象を正確に把握することはできないし、ゆえに関係性を厳密に対称にすることは断じて不可能である。可能だと思ったときには自分自身の権力性に対する想像力の欠如を疑うべきだ。そしてその上で、いかに想像を事実で補い続けても決して到達することのない認識の彼岸に、あらゆる他者は存在する。

話せばわかるなんて嘘っぱちだ。決して他人の考えていることなんてわからない。そのときそのときにおけるわかったつもりの妥当なラインに到達したという勝手な判断があるだけだ。その無限の距離を介在する至近距離の人間関係は、私の思考を常にかき回し、妨害し、そして牽引した。姿すら見えず外延を規定することのできないその「他者」に、しかし、人は多くの場合抛って立たざるを得ない。なにも何人も自分ひとりではどんな価値判断も下すことができないなどとは言わないが、わかってもらったことにならなければ言葉は発されても価値を持たないということは、これまで絶えず痛感してきた。そのために、お互いにわかったつもりになることで、同じ表象を共有したというサインを送り合うのである。そのサインは人が生きていくあらゆる局面で、極めてよく似た、しかし固有の、形容しつくしがたい形を持って存在する。

コミュニケーションが実質的には共通理解成立のサインのやりとりに支えられた、手探りの表象の照合作業であることと、関係性が厳密には対象にならないこととは、本来別のことである。別の次元に属する問題であると言ってもいいのかもしれない。だが両者は無視できない接点を持つ。本来対称でない関係を意識的に対称にする

ことが不可能なのは、関係性に対する認識を意識的に一致させることができず、さらにそれを確認することができないからである。そして、おそらくそれだけが原因ではないのだが、そのサインをあたかも投げつけるのかのとき攻撃的なコミュニケーションが生まれてみたり、権力性への警戒を権力的に表明し要求するという、説明しようと思うと入り組んでしまうメタ的狀況が発生したりする。

これから吉田寮を訪れるならば、寮自治会の公式の言明や、関係者の私的な考えとして、対話による問題解決が必須条件であることや、対等な関係性を確保することの重要さとその実現の様子とかについていろいろ話を聞く機会があるかもしれない。そしてまた実感として、相部屋になった人とてんで話が通じなかったら当然しんどいし、むやみと居丈高にあれこれ命じてくるような権力的な人に従わざるを得ないような状況に陥るのも避けたい。そういう断絶や権力性に対して、自治会はこれまでずっと敏感であろうと努力してきた。努力だけはしてきたと思う。

それはある意味で、決して無駄だとか間違っているとかは思わない。相互理解の不可能性を原理的に信じ続けていたら、またそれが組織的に行なわれていたら、それはそれは恐ろしいことのように思う。またそれゆえ権力性の排除は不可能なので排除する努力をやめることにしてしまったら、それもまたわかりやすく居心地の悪い空間が生まれそうである。だが、おそらくすぐに見えてくる。対話による問題解決も対等な関係性も、姿も見えず手も届かない彼岸の他者に向かう間に、それそのものすら手から零れ落ちてしまうのである。なにも想像しづらい話ではないと思う。相手が何を思っているのかわからない以上、相手が自分の話す作法や語勢、話している内容に恐怖したり嫌悪感を覚えたりしていることに気づかないことなんていくらでもあるし、そもそもそういう局所的な関係性の変化が人間関係から排除可能なはずはない。人は怒りもすれば泣きもする。そしてまた、相手が理解の像を結んでいなさそうだったり、相手の言っていることがよくわからなかったり、自分のほうが上になる非対称性が生まれていたりしても、それをいちいち問題にせず、困ったことにはならなそうなレベルであればいいかと思ってしまう機会は途方もなく多い。相手の脳味噌を引きずり出して直接読んだり書き込んだりしてやりたいと思うことがある一方で、だ。

以上のような話は、相部屋生活からのみ感じたことではない。無限の距離を介在する至近距離の人間関係は、寮内の至るところに存在するし、そしてまた決して避けられないものでもないと思う。正直なところ、こういうことを考える必要がどうしてもあるかと言われれば、私は疑問すら抱かない。所詮は市場経済によって早晚淘汰される人間のたわごとである。

こんないろいろごちゃごちゃ考えなくても、相部屋相手と過剰な干渉と断絶を避けながらうまく距離を保ちつつ、互いの有形無形の財産を共有しながら、一人での生活では味わえないいろんな面白いことや助け合うことを経験できたら、きっと幸せなんじゃないかな。

実感レベルでのアドバイスとして、吉田寮の事務室にあるとあるマンガの台詞を引用して結びたい。長々とどうもありがとう。

「狭いから適度な無関心が重要なよ」